

平成二十六年 入学試験問題

国語

文・教・経・医―医 二月二十六日(水) 一四・一〇―一五・五五
理(□のみ) 一四・一〇―一四・五五

注意事項

- 1、試験開始の合図まで、この冊子と答案紙を開いてはいけない。
- 2、問題冊子のページ数は十二ページである。
- 3、問題冊子とは別に、答案冊子中の答案紙が文学部、教育学部、経済学部と医学部医学科志望者には三枚、理学部志望者には一枚ある。
- 4、落丁、乱丁、印刷不鮮明の箇所などがあつたら、ただちに申し出よ。
- 5、理学部志望者は、□のみを解答せよ。
- 6、解答にかかる前に答案紙上部の折り目をていねいに切り離し、それぞれ、所定の二箇所受験番号を記入せよ。
- 7、解答は答案紙の所定の欄に記入せよ。所定の欄以外に書いた解答は無効である。
- 8、問題冊子の余白は草稿用に使用してもよい。
- 9、試験終了後、退室の許可があるまでは、退室してはいけない。
- 10、答案紙は持ち帰ってはいけない。問題冊子は持ち帰ってもよい。

— 1 —
次の文章を読んで、後の問に答えよ。

せんせい、あのね、きのうおじいちゃんのおうちでこいをつりました。ぬるぬるしていて大きかったよ。おじいちゃんはこいをほうちようで切って、おさしみとみそしるにしてくれました。でも、とてもくさくてたべられませんでした。おしまい。

*

^A 食べものとは何か。この問いに答えることは、じつは難しい。

たとえば、天井。ぷりぷりのエビや新鮮な野菜がサクサクの衣に包まれていて、炊きたての白米の上に載っている。しかし、これは、殻を引きはがし、頭と足をむしり取ったエビの死骸と、サツマイモやシイタケ、小麦、稲の一部あるいは全部をむしり取って生命を断ち切ったものの集合体である。

たとえば、ハンバーグ。切り分けるところと肉汁が出てくる。しかし、実はこれは屠殺した牛や豚の死肉を細かく刻んだ肉片に、バラバラに切り分けたタマネギの葉っぱの肥大した根元、鶏が産んだ無精卵の中身、そして、小麦の実の死骸を焼いて乾燥させたものを加え、^(ア)捏ねたものを熱で変質させた物体である。

天井もハンバーグも大好物で、なかなか先入観を崩すことができない人は、ピーター・グリーナウェイの映画『コックと泥棒、その妻と愛人』を観るのもよい。泥棒の親分と手下たちの、高級レストランの雰囲気似つかわしくない下品な食卓談話を聞き、食べものを吐き出すふるまいを眺めながら、食べものと排泄物・吐瀉物^(トシ)はどこで線が引けるのか、と考えることもできる。体外の液体および道具によって化学反応を加えた食べものと、体内の器官および液体によって化学反応を加えただけの排泄物・吐瀉物とは、どこが違うのか。

映画よりも本が好きという人には、マイケル・ポーランの『雑食動物のジレンマ』を勧めたい。植物も動物も食べることができる人間にとって、つぎの日に何を食^(ウ)べるかを決めることは必至の悩みである。しかし、^(イ)確固とした食文化がないと言われるアメリカの消費者は、栄養学的な言葉にソウシヨク^(ウ)された広告のいいなりになって、プロテインバーをかじり、サプリメント

を飲んで健康になろうとする、とポーランは嘆く。一方で、本来は飼料としてふさわしくないトウモロコシを食べて胃の中が酸性になり（通常は中性）、不調を来し、腹をかきむしり、土を喰う牛の肉を、放射線で〇157を滅菌したうえで食べる。いったい何をしているのかよく分からない現在の食の世界のなかで、他の生物を殺すことでしか、その殺すことの嫌悪感と向き合うことでしか、本当に美味しい食にはありつけない、という真実と、ポーランは、シユリヨウをしたり、鶏を屠殺したりしながら、向き合う。

要するに、食べものとは、叩いたり刻んだり炙^{あぶ}ったりした生きものの死骸の塊なのである。

読者の食欲を減退させることがここでの目的ではない。目的は違ふところにある。食べものは、祈りにも似た物語がなければ美味しく食べられない、という事実を確認するためだ。私たちは「食べもの」という幻影を食べて生きている。やつかいなのは、幻影であるがゆえに物語が肥大化することだ。

*

一つは、「見た目」という物語である。

『朝日新聞』の朝刊（二〇一二年十二月二十六日付）に「見た目重視 消える地方野菜」という、金沢市の農家の取材記事が掲載された。大根は、指一本入るほど曲がると「秀」から「優」に格下げ。値段も二割から三割安くなるという。黒いシミができたり、割れたりすると「良」や「規格外」に落ちる。味は全く変わらないのに、見た目で食べものの価値が決まる不思議な社会に私たちは生きている。「野菜は見た目が九割。きれいな野菜は消費者によく売れる。量販店は形が整い、日持ちがするものをほしがる。ここだけの話、味は二の次」。大阪市中央卸売市場の野菜卸売業者のこの告白は、現代日本の食のあり方をそのまま映し出している。現在、農村や都市の直売場などでは、こうした見た目の悪い野菜や果物を売っている。これは、消費者のなかにも、何かが過剰であることに気づきはじめた人が増えている証拠だろう。

この記事が優れていると思ったのは、均質で収量の多い品種、最近ではとくにF1品種（異なる品種を掛け合わせて作った種の一代目は均質かつ多収量である）の席卷で、在来品種が次第に姿を消しつつある、という事実にまで言及していること

だ。東寺かぶ、滝野川人參、砂村丸なすをはじめとする在來品種の絶滅した時期は、戦時中から高度經濟成長期にかけてだ。いびつな野菜たちは、市場では売れない。綺麗で、安全で、汚れない食べものは、まさに工業製品のようなものである。ここには、食べものの由來の記憶を殺そうとする欲望が隠されているように思えてならない。

*

二つ目に、「偽装」という物語である。

食品偽装はもはや日常サ^カハンジ。産地偽装、原材料の虚偽記載、不純物を混ぜる。腐りかけた食材を新鮮に見せたり、有害な物質を加えたりして、消費者の健康を害することさえある。ビー・ウィルソンの『偽装された食 毒のお菓子から二セコ―ヒ―まで――食料偽装の暗黒の歴史』を読めば、それがどれほど危険で、非人間的であるかに怒りを覚える。そして、そうした偽装を暴き、闘った人々、たとえば、一八二〇年頃のイギリスで、化学器具を用いて食品偽装のからくりを公衆に暴いたフレデリック・アークムや、小説『ジャングル』をシ^キツビツして、シカゴの食肉工場の労働者の悲惨と作られる食品のひどさを告発したアプトン・シンクレアは、まさに勇者として讃えられるべきだろう。食品業者が消費者を騙すという行為が、世界から消えてなくなる日を私は待ち望んでいるし、そのためにも、味蕾^{みらい}を毎日鍛えておかなければならないだろう。

ただ、ここでも、さきほどの大根と同質の問題が潜んでいることを忘れてはならない。食べものに、過剰なパッケージと、過剰な添加物と、過剰な広告費を投入している現在の食品企業のおかげで、消費者は食品から生命を抹消できるようになっている。腐るのが自然で、病原菌がついても不思議でない生きものの死骸に、潔癖^{けい}な清潔さを求めているのは消費者なのだ。

*

最後に、「差別」という物語である。

肉食が穢^{けが}れであるという仏教思想が支配的だった日本において、家畜から肉や皮を採る仕事は「賤業」とみなされてきた。いまなお、食肉が加工される過程は多くの人の目に触れることは少ない。

しかし、たとえば鎌田慧の『ドキュメント 屠場』が克明に描いているように、食肉加工に携わるには、すさまじい訓練と体力と知力が必要になる。一つ一つの作業に、一人一人の個性がでてくる。熟練者がさばくスピードと的確さは、賞賛的であ

り、尊敬に値する。プロ野球選手と食肉加工に携わる人と、どちらが賃金を高くすべきか。市場は、野球選手の仕事に何百倍もの価値を見いだす。果たしてこういう構造は健全なのだろうか。

*

では、どうすればいいのだろうか。幻影を捨て去ればいいのか。だが、それでは絶食して死を待つしかない。ならば、肥大化する物語を制御すればいいのか。これは現在の食品流通システムの巨大さを前にして、そう簡単にはできない。ならばこれはどうだろう。食品企業の作る物語に新しい物語を対抗させて、食べものを食べる。物語に物語を対峙^ケさせるのである。

私は、食べものをめぐる物語の抗争において緊急に必要なのは、「食べもの」を見直すことより以前に「食べる^Cこと」の制度の再設計だと考えている。物語を生み出す、装置のようなものだ。現在、生きものの命を奪う場所と、その亡骸^{なきがら}を美味しく食べる場所があまりにも遠く離れすぎていて、食の物語が分断されている(だから三〇秒のCMになりやすい)。そのかわりに、田畑、魚市場、湖、池、直売所や食肉加工場といった場所の近くが、食べることの拠点になる社会を設計する。たとえば、安価で美味しい食事が可能な公衆食堂を設置する。そこで、生命が奪われていく過程と生命が育っていく過程を近接させ、生命が奪われていく過程に携わる人々と、奪われていった生命を自己の生命維持のために取り込む人々とを交流させ、融合させようと努力することで、「生物のサイクル(循環する物語)のなかで生きる私たち」を確認するのである。

さらに、この公衆食堂には歴史が流れている。地元のお年寄りたちのレシピを聞き書きし、データベース化したうえで、それを係ほど年の離れた料理担当者が改良し、再現する。または、地元の伝統野菜をふんだんに使った料理が出される。年間行事に合わせたお菓子や料理が復活し、ふるまわれる。テーブル越しに世代を越えた交流が生まれる……。ドイツ語の物語 *Geschichte* は、歴史という意味でも用いられる。料理の物語が支配的な物語と拮抗し、あわよくば支配的な物語を^コり替えていく。

あるいは、そこに、ひとりで食べにくる。誰ともしやべることなく、ただ、カウンターに座ってマンガを読みながら黙々とごはんを食べる。ここには物語がない、という批判もあるかもしれない。食育的観点からすれば、これは孤食であり、批判す

べき現象である。だが、隣の人と話さなくても、とりあえず座っていることのできる、このゆとりに満ちた空間があることが、まず重要なのである。何回か通っているうちに、知り合いができるかもしれない。仕事の情報を得ることができるかもしれない。趣味の似ている人を見つけれられるかもしれない。公衆食堂は、さまざまな文脈が交差して網の目のようになっていく情報ステーションでもあるから、ただそこにいるだけで、地域社会が張り巡らせた糸に触れていられるのである。

これらは、「カリスマシエフ監修の味です」「地球に優しいです」「北海道の雄大な自然に触れて育った牛からの恵みです」といった類の薄くて消えやすい物語とは、別の物語だ。

Ⅱ、対抗する物語でさえ幻影かもしれない。しかし、本当に心に残る「食べもの」は、その来歴が、食べる人を圧倒させるものなのである――。

*

小学生のころ、祖父の家に行くたびに池の鯉にエサをあげていた。エサは蚕かいこのさなぎである。パラパラと播まくと、すさまじい勢いで口をパクパクさせて寄ってくるのが可愛くて楽しかった。

ある日、祖父からその鯉を釣って食べるから釣りの準備をせよ、と指令が下った。ひからびた山陰名物「アゴ野焼き」(トビウオの魚肉の蒲鉾)を針につけて、竹竿の先端からぶら下げ、濁った小さな池で、灰色の鯉がエサに食らいつくのを待つ。しばらくして、まるまる太った鯉が釣れた。これまでは小川に泳いでいるボラを近くの土からほじくり返したミミズをエサにして釣るのが楽しみだったから、それよりも力強い鯉のヒキは格別だった。

祖父は私の釣った獲物をタモですくい、井戸水を張った桶でしばらく泳がせる。二匹だったか三匹だったか覚えていない。しばらくして、コンクリートの流しのうえに大きなまな板を持ってきて、祖父は包丁で鯉をさばきはじめる。迫力に圧倒される。私の獲物の半分は鯉の洗い(つまり「おさしみ」ではない)に、もう半分は鯉こく(「みそしる」よりも正確な名称)に。食べるのを楽しみしながら、じつと料理の過程を眺めていた。

夕食の食卓には鯉のフルコースが並べられた。ところが、私はがっかりした。泥臭くて不味まずかったからである。鯉こくのなかの鯉は、鯉の残骸でしかなかった。祖父はあぐらをかいて、お猪口ちよこを舐めなめ、おくびを連発しながら美味しそうに食べて

いる。山奥の小作人のせがれであった祖父にとって鯉は貴重なタンパク源であり、ごちそうであり、それを孫に食べさせたかったのだろう。

その後、この家で同居することになったが、無口な彼とそれほど言葉を交わした記憶がない。だが、この体験は、祖父が亡くなったあとも、ずっと私の頭から離れない。

数年前、ある居酒屋で鯉の洗いをおそろおそろ食べたが、あまりにも美味しくて驚いた。あの泥臭さはなんだったのだろう、と頭をひねりながら、^D鯉という「食べもの」の物語に、しばらく酔うことができた。

（藤原辰史著「食べもの」という幻影」による）

【注】

○プロテインバー タンパク質などをスティック状に固めた栄養補助食品。

○サプリメント 錠剤やカプセル剤などの栄養補助食品。

○味蕾 味覚を感じる末端器官。主に舌の表面に分布する。

○孤食 一人きりで食事を取ること。個食。

問一 傍線部ア、イ、ロのカタカナは漢字に、漢字は読みをカタカナに、それぞれ改めよ。

問二 空欄Ⅰ・Ⅱに当てはまる語として、最もふさわしいものを次から一つずつ選んで記号で答えよ。ただし、同じ記号を二度使ってはならない。

ア	たしかに	イ	ただ	ウ	また
エ	ゆえに	オ	ならば	カ	たとえば

問三 傍線部Aで著者は「食べものとは何か」という「問いに答えることは、じつは難しい」と述べるが、それはなぜか。本文に即して九〇字程度（句読点・かつこ類も字数に含める）で説明せよ。

問四 傍線部Bにおいて言われる「現代日本の食のあり方」が、別の表現で最も端的に言い表されている一文を抜き出し、最初と最後の五文字（句読点・かつこ類も字数に含める）で答えよ。

問五 傍線部C「食べること」の制度の再設計」とは、どのようなことか。それを説明する本文の最も主要な箇所を一〇〇字程度（句読点・かつこ類も字数に含める）でまとめよ。

問六 筆者を酔わせた傍線部D「鯉という「食べもの」の物語」には、どのような事柄が含まれているか。本文に即して七〇字程度（句読点・かつこ類も字数に含める）で説明せよ。

次の文章は、平安時代後期の歌集『四^し条^{じょう}宮^{みや}下^{しも}野^の集^{あつ}』の一節である。作者下野は、後冷泉天皇の皇后四条宮寛子に仕えた女房である。この文章を読んで、後の問に答えよ。

内裏^{うち}より、夜まかでて、清水^{きよみづ}に詣^よでたるに、かたはらの局^{つばね}に、ただ今まで宮にさぶらひつる為仲が行ひしてある。「かく詣
でたりと、思ひかけじかし」とて、もろともに詣で給へる人の、「昔見ける人などの詣であへると思はせて謀^{はか}らむ」など言ひ
て、人の多く詣でて騒がしきに、書く所もおぼえず暗きに、硯^{すずり}求めて、あやしき人して、「京より」とて遣る。急ぎ出でて見
るなり。「あやしあやし」とたびたび言ふなり。

X(下野) 清水の騒ぐに影は見えねども昔に似たる滝の音かな

宮に参りたるに、「清水に詣でたりしに、いみじきことこそさぶらへ」とて語るを、人の上になして聞くがをかしけれど、けし
きにも出ださで、まことにをかしがる。「さるにても、誰とかおぼえ給ふ」と言へば、「それならむと思ふ人のがり、返りごと
はつかはしてき」と語る。

Y(為仲) 滝の音も昔聞きしに変はらずは流れて絶えぬ心とを知れ

誰待ち得て、心得ずと思ふらむとをかし。「返りごとやありし」と問へば、「さぶらひしかど心得ず」と言ふこそことわりなれ。

【語注】

○清水 現在の京都市東山区にある清水寺。境内に有名な音羽の滝がある。

○局 ここでは清水寺の堂内にある参籠用の小部屋の意。 ○宮 皇后の御所。

○為仲 橘為仲。当時の有名な歌人。 ○行ひ 読経などの勤行。

問一 傍線部ア、ウを、適宜主語などを補って、わかりやすく現代語訳せよ。

問二 XおよびYの和歌を、比喩表現に注意しながら、わかりやすく現代語訳せよ。

問三 二重傍線部「ことわりなれ」とあるが、その理由を、本文の内容に即して説明せよ。

次の文章を読んで、後の問に答えよ。但し設問の関係で送り仮名を省いた部分がある。

上元初、吐蕃強盛、詔募猛士以討之。婁師德以監察御史応募。

高宗大悦、授朝散大夫、專総刃任。前後四十余年、恭勤接下、

孜孜不怠。狄仁傑入相也、師德密薦之。及為同列、頗輕師德。

頻擠之外使。師德知之而不憾。則天覺之、問仁傑曰、師德賢乎。

対曰、為將謹守、賢則臣不知。又問、師德知人乎。対曰、臣嘗同

官、未聞其知人。則天曰、朕之用卿、師德実薦也、亦可謂知人

矣。仁傑大慚而退、歎曰、婁公盛德、我為其所容、莫窺其際

也。当危乱之朝、屠滅者接踵、而師德以功名終始、識者多之。

初、師德在廟堂、其弟某以資高拜代州都督。将行、謂之曰、吾

少^{わかクシテ}不^{ニシテ}才^{ニシテ}、位^ル居^ニ宰^ニ相^ニ。汝^{なんぢ}今^{イマ}又^{マタ}得^ユ州^{ミナト}牧^ニ。叨^{みたりニ}擢^ニ過^ニ分^ニ人^ノ所^ニ嫉^{ねたム}也。将^{はた}何^ヲ
 以^テ終^{ヘント}之^ヲ。弟^{ハク}对^{ヘテ}曰^{ハク}、自^ミ今^{イマ}雖^モ有^{ツバ}唾^ニ某^{マカニ}面^ニ者^ハ、亦^モ不^レ敢^テ言^フ、但^ラ自^ミ拭^{ハバ}之^ヲ、
 庶^{チカシト}不^レ為^{ルニ}兄^ニ之^ノ憂^{ヒト}也。師^{ハク}德^ニ曰^{ハク}、此^{マカニ}適^ニ為^ル我^ガ憂^{ヒト}也。夫^レ前^ニ人^ノ唾^{スル}者^ハ、発^{スル}於^ニ
 怒^{リニ}也。汝^{ハク}今^{イマ}拭^{ハバ}之^ヲ、是^レ逆^{ラフ}前^ノ人^ノ怒^{リニ}也。唾^{シテ}不^レ拭^ハ、将^ニ自^ラ乾^{カント}、
 何^ニ如^{イづレゾト}笑^{ヒテ}而^モ受^{クルニ}之^ヲ。弟^{ハク}曰^{ハク}、謹^{ンデ}受^ク教^{ヘヲ}。師^{ハク}德^ニ与^ル人^ノ不^レ競^ハ、皆^ノ此^ノ類^ノ也。

（『大唐新語』による）

【語注】

- 上元 唐代の年号。
- 吐蕃 チベットの王国。
- 婁師德、狄仁傑 いずれも人名。
- 監察御史、朝散大夫、都督 いずれも官名。
- 高宗 唐代の天子。
- 辺任 辺境の任務。
- 孜孜 つとめ励むさま。
- 相 宰相。
- 外使 外国への使者。
- 則天 則天武后。
- 擠 おしのける。
- 屠滅 ほろびる。
- 廟堂 朝廷。
- 際 際限。
- 州牧 州の長官。

問一 波線部 a「密」b「頗」c「嘗」の読みを、それぞれひらがなで記せ。

問二 傍線部 1「覺_レ之」は、何を覺つたのか説明せよ。

問三 傍線部 2「大慚而退」とあるが、それはなぜか説明せよ。

問四 傍線部 3「自_レ今雖_レ有_下唾_ニ某面_一者、亦不_ニ敢言_一」を書き下し文にせよ。

問五 傍線部 4「我憂」とは何か、説明せよ。

問六 傍線部 5「何_コ如笑而受_レ之」を現代語訳せよ。

問七 婁師徳はどのような人物か、本文の内容を要約しながら百五十字以内で述べよ。